育児期の家族の中で生活している女性の自己概念 —「母親としての自己」・「母親として以外の自己」の分析—

山 崎 あけみ*¹

A Self-conceptual Descriptive Study of Childrearing Women and Their Family —Analyses of “The Self as a Mother” and “The Self as an Individual with a Life of Their Own”—

Akemi Yamazaki*¹

*¹ Special Division of the Science of Midwifery College of Medical Technology, Kyoto University

Abstract

A retrospective exploratory-descriptive design was used to describe the modern Japanese women's self-concept during the early stages of childrearing. The purpose of this research was to explore how a Japanese woman's self-concept changes after she becomes a mother. Seven women, aged 28 to 38, from a purpose sample, were interviewed at home using the semi-structured interview guide.

The core category, “someone needs me”, provided the more significant indicator of women's self-concept, reflecting the importance of their existence to others. Findings indicated that the modern Japanese woman seeks to be needed by two parties: their children and society. One of these needs originates in the self as a mother. The other originates in the self as an individual with a life of their own. In the acceptance, through family life, of the fulfillment of the two selves, “myself needed by my child” and “myself needed by society”, the self-concept of modern Japanese women during the early stages of childrearing was defined.

要 旨

本研究は、育児期の家族の中で生活している女性の自己概念を記述することを目的とした。中でも、自己概念を「母親としての自己」と「母親として以外の自己」にわけて注目し、その二つの自己の存在状況を明らかにした。3歳児を育児中の女性7名を対象として、半構成面接を実施し、帰納法的・質的因子探索型の分析を行った。

育児期の女性の自己概念は、他者から必要とされる自己の獲得により充実が得られるという結果を得た。さらに、わが子に必要とされることは、「母親としての自己」を、社会（職場）で必要とされることは、「母親として以外の自己」を充実させ、現代の育児期の女性はその二つの自己の充実を望んでいた。そしてそのことを受容する家族と生活している女性の自己概念は「調和」しており、「母親として以外の自己」の充実を受容しない家族と生活している女性は、「葛藤」していた。

*¹ 京都大学医療技術短期大学部

I. はじめに

現代日本の出生率の低下は、世界からも注目されている現象であり¹⁾、高齢人口の増加と相まって、深刻な社会現象として取り扱われ、厚生省からもエンゼルプランなどの対応策が講じられている。医療の進歩と生活水準の上昇によって健康で長生きできるようになった一方、その福祉を維持するだけの労働人口の保持が危惧されるくらいに日本女性は子どもを生まなくなった。この背景としては、女性の高学歴化や社会進出などによる晩婚化や少産化などが影響因子として様々な分野から指摘されている。しかし、看護の領域の研究は、今なお「女性＝母性」の思考が強く、リプロダクティブヘルスに焦点をあてたものは多いが、母性以外の女性固有の健康問題に関する看護研究については少数である。さらに臨床場面で母親への過渡期の女性を援助する時も、多くの看護婦や助産婦は、母親役割があまりに生活のすべてを占領してしまうので、

わずか前にはその女性には、母親でない生活が存在していたということには注意が向けられていないのが現実である。

看護が対象を全人的・包括的に捉え生活を援助するための実践であるなら、女性にとって、たとえ重要ではあるにせよあくまでも1つの側面にすぎない「母性」にのみ過大に傾倒すべきではない。男性が父親として以外の生活を当然持つように、女性に対しても母親として以外の生活も含んだその人全体を捉えなければならない。そのためには、育児期の女性が、「母親として以外の自分」をどのように認知しているのか、それが「母親である自分」とどう関わっているのかを明らかにすることが必要ではないだろうか。

II. 本研究の枠組み

本研究の目的は、育児期の家族の中で生活している女性の自己概念を記述することである。自己概念は、自己満足、自己受容、自尊心など

図1 研究の枠組み

を含む自己の全体的な認識を決定するものである²⁾。多くの先行研究は、母親時代への過渡期には、自尊心が女性の自己概念の鍵となることを指摘している^{3~8)}。そこで本研究では、自己概念を、理想イメージと自己イメージが一致すればするほど自尊心は高まり、自己は充実するという枠組みで捉える。さらに「母親としての自己」と「母親として以外の自己」にわけて注目し、その2つの自己の存在の状況によって、育児期の家族の中で生活する女性の自己概念を記述することを試みる。

Ⅲ. 研究方法

本研究は、後方視的・記述的研究である。データ収集や分析方法は、人間の日常生活の自然なセッティングの中での経時的な経験の深さに対応できるようにSchatzman & Strauss (1973)の提唱したField researchの手法⁹⁾より帰納法的・質的因子探索型の研究法を用いた。

1. 対象

母親時代は、子どもを持つ女性の人生の大半を占める長い期間である。本研究では、Duvallの家族看護学の発達アプローチの観点から¹⁰⁾、夫婦が両親へと移行する過渡期である、第1子が生後30カ月になるまでの育児期の初期に着目した。この時期の女性が、母親役割を獲得する過程の中で、母親でなかった時代の自己との間でアンビバレントな状態にあることは、多くの文献の示唆するところである^{11~13)}。研究の目的を満足させるために、この時期の自己を振り返ることのできる3歳児一人っ子を育児中の女性を対象とした。

2. パイロットスタディ

本研究に着手するための前段階として、1993年1月から3月中旬にかけて、アメリカ在住で育児中の日本語を母国語とする女性3名、英語を母国語とする女性3名の計6名に対して自宅訪問し、インタビューを実施した。パイロットスタディでは、多くの欧米の文献が示唆している「母親でない自己と母親としての自己のアンビバレントな2つの自己」が日本文化を有する

女性にも存在するか否かを踏まえて、インタビューの概要を作成するためである。面接は、「良い母親」「悪い母親」「母親になって私自身に得られたこと」「母親になって私自身が失ったこと」の4つの項目について母国語で自由に展開してもらった。その結果と文献検討から、半構成面接の概要を作成した。

3. データ収集・分析のプロセス

1993年7月から8月中旬に、地方都市の私立保育園において研究目的を説明し同意が得られた女性およびその育児仲間計7名に、自宅訪問して平均1時間42分の面接を行った。面接内容は、面接の進行に伴い新たに表出された傾向性を先の半構成面接の概要に加えながら実施した。データは、対象の了解のもとに録音した。文章化されたデータの逐語録、コード化した一事例ごとの概念図、比較分析により抽出されたカテゴリーは、英文と日本語で作成した。分析は、育児期の家族看護学を専門領域とし、質的研究方法を実践しているアメリカ人の指導により英文で行った。

Ⅳ. 結 果

本研究に参加した3歳児を育児中の7人の女性の自己概念は、2つのカテゴリー「母親としての自己」「母親として以外の自己」が「葛藤」している3人と「調和」している4人に分類された。2つの自己を記述するための5つのサブカテゴリーを述べ、続いて現象の中核となる概念であるコアカテゴリーを述べる。最後に2つ

表1 対象者のプロフィール

番号	年齢	児の性別	本人の職業	夫の職業	家族形態
#1	28歳	女兒	専業主婦	会社員	核
#2	29歳	女兒	薬剤師P	会社員	核
#3	29歳	女兒	看護婦	看護師	核
#4	34歳	女兒	経理P	建築業	核
#5	29歳	男児	農業	農業	拡大
#6	29歳	男児	工場手伝い	工場経営	拡大
#7	38歳	女兒	事務P	会社員	拡大

※本人職業欄のPはパートを示す。

パイロットスタディ・文献検索による面接の概要の抽出

育児期の自己概念のキーワード 「理想イメージ」：どのようなお母さん/自分でありたいか?

「自己イメージ」：現実にはどんなお母さん/自分か?

図2 分析のプロセス

の自己が「葛藤」している女性と「調和」している女性の自己概念の全体像を記述する。

1. 母親としての自己

①わが子の自己の尊重

対象者全員が、最も重要な母親の理想イメージとしてあげたのは、わが子の自己を尊重することであった。わが子は自分とは異なる自己を持った個人であり、その言動にはその子なりの意味や主張があり、それを尊重できることが母親としての理想イメージであると彼女達は表現した。

しかし、わが子の自己を尊重し自立させたいと願う一方、日常の多忙な育児の中では幼児の未熟な日常動作を見守り待つことが難しい。そのため、わが子の自己の尊重を理想としながらも、ほとんどの対象者の発言からは、「子どもの自己を尊重できない自分」という自己イメージが表出された。

またある対象者は、3歳児には親には立ち入れない子ども同士の世界があり、それは最近切実に感じるのだと述べた。しかし子どもの世界を尊重し、その世界が少しずつ広がってゆき親離れすることを見守ることが、わが子の自己を尊重することにつながると述べた。

②自己犠牲

対象者全員一致して、わが子の自己を尊重することが母親としての理想イメージであったが、母親自身の自己犠牲については2種類の見解に分かれた。対象者は、献身的・自己犠牲的な母親が理想イメージであるという考え方は過去のもので、現在の日本では母子双方にとって悪影響であると全員が答えた。しかしながら、悪影響である理由については、自分自身の自己を大切にできない母親は、子どもの自己を尊重できないという見解と、自分には自己犠牲はできないから、ストレスがたまり子どもに悪影響を及ぼすという見解に分かれた。前者の対象者(＃2・3・4・7)は、自分と子どもの自己を明確に区別し、両方を尊重すべきだという考え方であり、献身・自己犠牲・母子の一体感といった伝統的な日本の母親の理想イメージを明確に否定している。これに対して、後者の対象者(＃1・5・6)は、伝統的な理想イメージを全面的に否定するのでは必ずしもなく、あくまでも自分には受容不可能なものとしている。

③わが子に必要とされる自己の認知

このように母親としての理想イメージと自己イメージについては、日常の子育てを通じての

データ 1

①わが子の自己の尊重：子どもの意思の尊重

5 やっぱりこの3年間育ててみて、子どもってというのはひとりの人間であるのが基本だから、所有物ではないから、小さなうちはやっぱり親としては一歩先を歩いて手をかけて、ある程度大きくなったら一歩後を歩いて見守ってあげたいなと、そういう親が自分としては理想です。

4 極力、(子どもの言うことは)尊重してあげたいと思うし、この位の子って、なんでも自分をものすごい強調するでしょう？とにかく自分でやりたい。けど、私も感情的になることがあるんで、そういう時にバツと口から言葉が出て、後悔するんですよ。

(どのような時ですか？)
ものすごくきかん坊になるんですよ、うちの子は。どういう時かというと、保育園が遅れるとかいう時にですよ、早くしなさいというような形で言っていて先ほども言うたように全部自分でしたがるんですよ。そういう面でイライラして怒ったりすることがあるんですよ。ほんとうは、やっぱりおこられないしね。ほんとは、私がおもっと計画的にしていかなといかんとか反省が多々ありますね。

①わが子の自己の尊重：子どもの世界の尊重

6 保育園へ行きだしたら、子どもの方が親をだんだん敬遠するようになるね。お友達を選ぶんですよ。遊びたい、同じ遊びを、同じレベルで。いっしょに遊ぶのが楽しいみたいだね。私なんか部屋へ入ってゆくと「おかあさん来なや」っていうし完璧に3歳にして子ども同士の世界できてます。友達が5時で帰ったら「おかあさん」って来るわけ。そういうもんですよ子どもって。自分達の世界っていうのは大事やと思うから親はじっと見守るだけ。親がベタベタはどうかと思うし。

多くの逸話が表出されたが、2つのイメージの一致を示唆する発言はみられなかった。本研究の対象者全員は、母親としての自己の充実、わが子に必要とされる自己を認知する時に得られると表現した。

2. 母親として以外の自己

④自分自身は誰だかわからない

1・5・6は、子どもを生んでからあとの今日までの人生の中では、母親としての生活時間、役割、アイデンティティーに占領され、それ以

データ 2

②自己犠牲：否定

4 いつでも子ども中心にはできないし、子どものためっていう人生っておかしいと思う。たぶんおかあさんべったりやったらその子はそ

②自己犠牲：受容不可能

1 それはもうそのおかあさんの性格によると思うんですよ。母親っていうのは生まれたらこうだんだん自分を犠牲にしておさえて母親になってゆくというのがあるんですけどずっと子どもさんとそう接していられる方だとむしろそれはいいと思いますけどね。私の意識の中では、理想的な母親っていうのは、家にずっといて、子どもに対して常に接してっていうのが、すごくあるんですけどね。私はわがままな性格だからできないです。

データ 3

③わが子に必要とされる自己の認知

1 やっぱり子どもが頼ってくる。おかあさん、おかあさんって、私じゃないとダメだっていう場面に接した時ですね。この子にとっての必要性……パパじゃダメ。おばあちゃんじゃダメ。やっぱりママじゃないとダメなんだって時に私がこの子の母親なんだなって思う。
(ご自分の～ちゃんにとっての必要性を感じる時?)

例えば、主人と一緒にいて遊んで。まあ、眠くなったときとか、パパにだっこしてもらって寝ればいいのに、「ママじゃないとダメ」って……そういう時は、グンとうれしくなる。

データ 4

④自分自身は誰だかわからない

1 (母親の部分を除いて、自分はどういう人でしょう?) くすぶってる……どうなんだろうな。難しいな。いやあ、いつでも主婦であり、いつでも〇〇ちゃんのおかあさんなんじゃないかな。今は、100%おかあさんしてますね。

6 外へ出てゆく仕事とかやったら切り替える瞬間があるかもしれんけど、もうドア一枚やらねえ、姑もいるし。今までに何回かふと考えるのは子ども預けて仕事してる自分が何者であるかっていうことですね。

外の自分が存在しないことの空しさを表出した。中には、有職者もいたが、農業など家族単位の職場で、家族関係から離れた自己が見い出せず、仕事でも子どものことを忘れて切り替えることができない点が共通していた。さらに、母親以外の自分が存在しない生活に満足している状況はどの対象者からも表出されなかった。

⑤社会(職場)で必要とされる自己の認知

母親として以外の自己の充実とは、社会に出て職業を持つことから得られていると表現されたが、(#2・3・4・7)職業婦人としての明確な理想イメージは表出されなかった。むしろ、職場の同僚などから名字で呼ばれ、〇〇ちゃんのおかさんという自分以外の存在価値が評価される時、最も母親として以外の自己の充実が得られると述べた。このような対象者は、自分の

データ5

⑤社会(職場)で必要とされる自己の認知

#2 やっぱり、外に出て仕事をしたらすごく気分が変わるし、自分っていうか、一人の人間っていうたらおかしいけど、それを感じるし。自分が必要とされているっていうか、仕事へ行ったらそこに何人かやりますけどいないと困りますよね私自身、自分が必要とされているというのがすごくうれしいし、私個人の存在感っていうのは、もう職場でしかないですからね。

時間を持つことと、そこで母親として以外の自分がいることの重要性を表出した。

3. コアカテゴリー: Someone needs me

本研究の対象者である3歳児を育児中の女性の自己概念は、理想イメージと自己イメージだけでは記述できなかった。多くの対象者は、自己イメージを語る時、それが母親としての自分であれ、妻、嫁あるいは職場での自分であれ、まず自分の理想イメージから外れている部分について強調する傾向がある。しかしながら、そのことによって自己が充実していないと判断するのは早計である。実際には、「母親としての自己」「母親として以外の自己」いずれのカテゴリーの記述においても、他者からどのようなイメージで評価されるかにより、自己が充実するか否かが決定していた。他者であるわが子あるいは職場の人々が、肯定的イメージで自分を評価する時、中でも『自分の存在を必要としている』時が最も自己が充実すると全員が答えた。

4. 育児期の家族と女性の自己概念

1) 葛藤している女性と家族

#1・5・6は、「母親としての自己」と「母親として以外の自己」の2つの自己の充実を求めているが得られずに、葛藤している状況が表出された。これらの対象者からは、#1では夫

図3 2つの自己が葛藤している女性の自己概念: #1・5・6

データ 6

自己概念が葛藤している女性の家族像

#1 やっぱ仕事は満足だったと思いますよ。生き生きと生きがいのひとつだった。でも主人が母親の手で育てるみたいな感じがあって、もうできないんだと気持ちは捨てました。自分がストレスのかたまりだから働きに出たいと思って、自分の時間が欲しいと思って。子どもも私では満たしてあげられない部分が出てきてお友達と遊びたいとか、だから保育園って思ったんですけどね。

#5 やっぱ、時代は流れているから、昔は昔で、今は子どもを預けて仕事にでて、子どもという時間が少なくなっても悪いことだとは思わないし。でも、私自体は、農家なんで、(子どもに)ずっとかかわろうと思ったら、仕事していてもできるし、そのラインが難しいんですよ。自分に還れるときって、夕飯終わって、寝るほんの前だけです。自分だけっていうか、自分のこと考えることができる時。でも、空時間あったら、家族の世話してますね。24時間、家族の目があるってしんどいですよ。自分の時間がないから、自分の心の中で葛藤があるんですね。

が、#5では嫁ぎ先の家族が、対象の母親として以外の自己の充実を受容していない状況が表出されている。つまり、家族が対象に対して抱く理想イメージと、対象者自身の抱く理想イメージとにギャップが生じている。よって、葛藤している女性の描く家族像は、共通して否定的で

あり、母親として以外の「自分自身が誰だかわからない」ような日常生活を過ごさねばならない要因として家族が存在している。

2) 調和している女性と家族

#2・3・4・7は、わが子と職場から必要とされることを通じて、2つの自己の充実が得られ調和している状況が表出された。これらの対象者からは、母親として以外の自己の充実を家族が受容している状況が表出されている。例えば、#3の夫は子どもに対して母親同様の親役割をとっているの、その対象者は子どもに対

データ 7

自己概念が調和している女性の家族像

#3 もう生まれた時からそうですからね。本人(子ども)にとっては、おとうさんもおかあさんもほぼ同じで、夫婦ともに半々で育ててる。だから(私は)、自分の部分、おかあさんの部分がきっちりわかれてる。自然にそうなる。

#4 (母は)とにかく、じっくり子どもをみてるんです。母自体は、なんでも相談できるお母さんでした。安心するんです。極力なんでも、私の言うことやしたいことは、させてやりたいと思っていたことが、今になってすごくわかるんですね。本当に子どもにとって必要な人だと思います。それこそ、こんな母が近くにおりますんで、見てもらったりとかね。やっぱり、こう、思う存分仕事はできますね。

図4 2つの自己が調和している女性の自己概念：#2・3・4・7

して、母親である自分を常に最優先させる生活はしていないと述べている。また、#4の実母は、幼い頃から今日に至るまで、一貫して対象の自己決定を肯定的に受容していた。その実母の協力により、育児と仕事を両立して生活していると述べている。このように調和している女性の抱く家族像は、共通して肯定的であり、2つの自己が調和して生活できる要因として家族が存在している。

V. 考 察

1. 母親としての自己

Deutsch¹⁴⁾は、「犠牲をものとしめない愛他的な心がまえを元にした調和のある子どもとの関係の形成」が、母親らしさとしてまず初期の段階でもとめられるが、最終的には子どもの成長に伴って、「心理的臍帯の切断」つまり調和のある態度でその関係を解消することが要求されるとしている。さらに、前者の「愛他的母親らしさ」は比較的容易に到達できるのに対して、後者の「子どもの自己の尊重」こそ真の母親らしさが要求される困難な課題だとしている。理想的な母親らしさは、妊娠期間の母子の愛着形成に始まり、最終的には、独立した自己を持った個人として子どもを認知することにより完成するという点は様々な文献が示唆することである^{15~17)}。

前項の文献では、母親が自分とわが子の2つの自己を明確に分けてどちらも尊重することが理想的な母子関係といえるようである。しかしながら、愛他的・自己犠牲的母親像は、伝統的な日本の母親像では、必ずしも初期の段階で消滅してしまう程度の理想イメージとはいえず¹⁸⁾、そのことは、本研究の結果からも示唆された。対象者は、子どもの自己を尊重する点においては全員一致したが、母親の自己犠牲については、否定的な者と自分には受容不可能とする者に分かれた。ここでは、対象者の家族の抱く母親としての理想イメージが大きく影響する点を見逃すことができない。本研究の対象者は、自己犠牲的な母親については一様に否定的であった。しかし、家族が対象者同様に、伝統的な母親イメージを否定しているのでは必ずしもないために葛藤が

生じていたのではないだろうか。この点については、母親として以外の自己の捉え方との関係からも考察するべきであろう。

2. 母親として以外の自己

現代女性のライフサイクルを表わす統計データはキャリア志向に傾いており、母親としての自分だけで一生を過ごすことには満足しない女性が増えていることを示している。従来、就業している日本女性は妊娠すると退職し、子どもが成人した後に、パートタイムなどで復職するという傾向が強かった。これは、労働人口のM化現象といい、25~39歳の育児期の女性の労働人口が男性に比較して落ち込んでいるのが特徴的であった。ところが近年、25~29歳の女性の労働人口が増加傾向にあるという¹⁹⁾。このデータからは、第1子の出産年齢の上昇と育児休暇などを活用し出産後も職場復帰する女性の増加が伺える。

一方、母親が、母親として以外の生活をもつ、例えば、仕事をするということについては、賛否両論があるのも事実である。Cleary & MechanicやVerbruggeは^{20~21)}、働く母親の心理学的特権について述べ、仕事を通じて女性が経験する自分に対する自信や肯定的感情が自己を充実させると示唆している。しかし、金沢が指摘するように²²⁾、日本の働く母親は、働きたいという確かな欲求がある一方、子どもを保育所などに預けることに大変否定的な感情もある。つまり、多くの日本の母親が、子どもから離れて働くことに対して罪悪感を抱いていることも事実で、必ずしも女性の自己の充実につながるとはいえない。

「葛藤している女性」は、子どもが生まれてからは「母親として以外の自分自身は誰だかわからない」と表現した。この対象者たちは同時に、母親としての自己のサブカテゴリーである「自己犠牲」について、自分には受容不可能であると表現した女性達である。Norbeck & Lock²³⁾は、日本の女性の結婚後の伝統的な理想的ライフスタイルとしての「良妻賢母」について言及している。良妻賢母は、子どもが生まれて後の自分の人生をわが子と家族に捧げ、Selflessness

一自己がないこと一を要求されるとしている。このように自分を殺し家族のために生きingことを美德とする価値観は、本研究において「葛藤している女性」の生活する周辺の中にあったことが推察できるのではないだろうか。

3. 女性の自己概念と家族の存在

Mead²⁴⁾は、個人の自己は、その人が属する社会の規範や価値観によって決定されるとしている。つまり、自己概念は、自らが属する社会からの評価を意識的・無意識的に取り込みながら構成される過程を持つ。社会の基準や価値観は各々の社会集団によって違いがあるので、その人の自己概念を査定するには属する社会の規範を考慮するべきである。

本研究の結果では、女性にとって「わが子から必要とされる自己」と「社会で必要とされる自己」両方の自己の充実を受容する家族と生活している対象者の自己は調和し、「わが子から必要とされる自己」しか受容できない家族と生活する対象者の自己は葛藤していた。つまり、家族は最も重要で基礎的な社会集団であるから、女性と生活する家族のライフスタイルや価値観は、女性の自己概念に大きく影響することは頷ける結果である。さらに、西洋社会では、個人が集団に拘束されず自由に決定権を持つ点に価値を置く。一方、日本社会は個人が社会集団の一員として調和できる点を重視する²⁵⁾。このようなグループメンバーシップに重きをおく社会規範を考慮すると、日本人の自己概念は、自己評価よりも属する社会集団のメンバーからの評価により影響されると言える。これらのことから、育児期の家族と生活している女性にとって、家族の持つ女性に対する理想イメージや自己イメージは、その女性の自己概念に大きな影響を及ぼすものであると言える。

VI. 臨床への提言

育児期の家族の中で生活している女性が、本研究から示唆されるような2つの自己の「調和」を獲得するために、看護師はどのような援助が可能であろうか。まず第1に、自分とわが子の自己を明確に区別し、両方を尊重するような母

子関係の育成を目標とすることの必要性が示唆された。従来の生活援助の中心は「母親としての自己」に対して偏りがちであったが、看護師は「母親として以外の自己」の充実にも意識的に関わることが必要ではないだろうか。第2に、「母親として以外の自己」の充実に向けての関わりは、母親自身に対してだけでは意味がないことが示唆された。最も身近で基本となる社会集団である家族に対しても同様になされるべきであろう。女性は母親として以外の自己の充実も望んでおり、家族がその生活を受容できるような看護師の関わりが必要であることが提言できる。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究の限界としては、研究者自身がデータ収集の道具となっており、質的データの分析過程において研究者のバイアスが反映されている可能性が考えられる。また面接の依頼に対して承諾した対象者は、育児について否定的感情が少ない可能性があり、母集団を適切に代表しているとは言えない。今後、結果の信頼性と妥当性を高めるためには、様々な設定の母親において検証する必要があるだろう。

VIII. 結 論

育児期の家族の中で生活している女性の自己概念は、コアカテゴリー『自分の存在を必要としている』を軸にして以下のように記述できた。2つの自己—「母親としての自己」「母親として以外の自己」—の充実を受容している家族と生活している女性の自己概念は、わが子と社会から必要とされる自己の認知により「調和」していた。一方、「母親として以外の自己」の充実を受容できない家族と生活している女性の自己概念は、自分自身は誰だかわからない状況の中で「葛藤」していた。

謝 辞

この論文は、1994年に、Oregon Health Sciences University看護学部修士課程において学位論文として提出された論文を加筆・修正したものです。インタビューに快くご協力くださいました

方々と、最後まで変わることなく教育者として暖かくご指導くださいました、Linda Robrecht 博士、Margaret Imle 博士に心から感謝いたします。

引用文献

- 1) Weisman, R.S.: In crowded Japan, a bonus for more babies angers women. *The New York Times*, pp.1, 14, February 17, 1991.
- 2) Wylie, R.C.: *The Self-concept*, (Vol. 1) Lincoln, NE: University of Nebraska Press, 1974.
- 3) Briggs, E.: Transition to parenthood, *Maternal Child Nursing Journal*, **8**, 69-83, 1979.
- 4) Curry, M.A.: Maternal attachment behavior and the mother's self-concept: The effect of early skin-to skin contact. *Nursing Research*, **31** (2), 73-78, 1982.
- 5) Grossman, F.K., Eichler, L.S., & Winickoff, S.A.: *Pregnancy, Birth, and Parenthood*. London: Jossey-Bass Publishers, 1980.
- 6) Hrobsky, D.F. JR, Transition to parenthood: A balancing of needs. *Nursing Clinics of North America*, **12** (3), 457-468, 1977.
- 7) Mercer, T.R.: *First-time Motherhood: Experiences from Teens to Forties*, New York: Springer, 1986.
- 8) Leifer, M.: Psychological changes accompanying pregnancy and motherhood. *Genetic Psychology Monographs*, **95**, 55-96, 1977.
- 9) Schatzman, L. & Strauss, A.L.: *Field Research: Strategies for a Natural Sociology*, New Jersey: Prentice-Hall, 1973.
- 10) Duvall, E.M. & Miller, B.C.: *Marriage and Family Development* (6th ed.). New York: Harper & Row, Publishers, 1985.
- 11) LaRossa, R.: *Becoming a Parent*. California: SAGE Publications, 1986.
- 12) Larsen, V.L.: Stresses of the childbearing years, *American Journal of Public Health*, **56**, 32-36, 1966.
- 13) Lederman, R.: *Psychosocial Adaptation in Pregnancy: Assessment of Seven Dimensions of Maternal Development*, New York: Prentice-Hall, 1984.
- 14) Deutsh, H: *Psychology of Women*, Vol. 2, Motherhood, 1945, 懸田克躬・原百代訳: 母親の心理 2, 日本教文社, 247-261, 1945.
- 15) Fromm, E: *Art of Loving*, 1956, 鈴木晶訳: 愛するということ, 紀伊国屋書店, 65-75, 1991.
- 16) Chodorow, N.: *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender*, Berkeley: University of California Press, 1978.
- 17) Rubin, R.: Attainment of the maternal role : Part I. processes. *Nursing Research*, **16** (3), 237-245, 1967.
- 18) 山村賢明: 日本人と母—文化としての母の観念についての研究一, 東洋館出版社, 1970.
- 19) 総理府編: 女性の現状と施策—世界の中の日本の女性—大蔵省印刷局, 1994.
- 20) Cleary, P.D. & Mechanic, D.: Sex differences in psychological distress among married people, *Journal of Health and Social Behavior*, **24**, 111-121, 1983.
- 21) Verbrugge, L.: Multiple roles and physical health of women and men. *Journal of Health and Social Behavior*, **24**, 16-30, 1983.
- 22) 金沢佳子: わが子がかわいく思えない, NHK出版, 49-54, 1993.
- 23) Norbeck, E. & Lock, M. : *Health, Illness, and Medical Care in Japan : Cultural and Social Dimensions*. Honolulu: University of Hawaii Press, 130-157, 1987.
- 24) Mead, G.H.: *Mind, Self, and Society: From the Standpoint of a Social Behaviorist*, Chicago: University of Chicago Press, 200-209, 1934.
- 25) 土井健郎: 「甘え」の構造, 弘文堂, 160-172, 1971.